
当院人工透析室における看護必要度調査

佐藤幸子、木村房子
大館市立総合病院 人工透析室

The Evaluation of the Grade of Nursing Requirement in Hemodialysis Patients in Odate Municipal Hospital

<諸言>

近年、透析患者数は毎年1万人ずつ増加しているといわれており、2008年度におけるわが国の透析患者数は28万人に達し、国民の500人に1人の割合になっていると報告がある。¹⁾

当人工透析室においても、昨年度より維持透析患者が13名増加しており、現在総患者数は69名となっている。患者内訳としても、糖尿病性腎症による透析導入している方が53.6%と半数を超え、脳血管障害や心血管系疾患などの合併症があり、綿密な観察を要する患者が増加している。また認知症やADLの低下などにより車椅子使用の方など手厚い看護を必要としている患者も多い。

しかし患者数は増える一方で、昨年度とスタッフの人数が変わりなく、業務に追われるため、患者とのコミュニケーションの時間や患者指導の時間が減少している現状である。

本研究では2004年に杉田らによって報告された「透析看護必要度と適正人員配置基準の検討」²⁾をもとに当院人工透析室における看護必要度を調査し、現状を把握することを目的とした。得られたデータは、今後のスタッフ人数の検討や安全な看護の提供、看護の質の向上につながるための資料となると考える。

<研究方法>

1. 研究デザイン：実態調査研究
2. 研究期間：平成22年7月19日～7月24日
3. 調査内容：当院人工透析室にて血液透析を行っている患者69名
4. 研究場所：人工透析室
5. データ収集方法：日本腎不全看護学会誌2004年No2, Vol 6に掲載されている杉田らによる「透析看護必要度と適正人員配置基準の検討」²⁾より透析室の看護必要度分類表(表1)を用いて患者の看護度の測定を行った。

看護度の測定は、観察・処置の程度を4段階、自立の程度を3段階にて分類し、分類表よりケアの度合いを得点化した。

6. 分析方法：1) 2007 年～2009 年の 4 月 1 日に行われ、まとめられていた看護必要度調査結果と、今回得られた看護必要度調査の結果を比較した。

2) 2007 年～2010 年 4 月 1 日現在の患者数とスタッフ数を調べ、現在の患者 10 人当たりのスタッフ数の割合を算出した。

計算式：総患者数÷スタッフ数×10 人

表 1. 透析室看護必要度分類表

観察・処置の程度 自立の程度	I	II	III	IV
	1 時間ごとの観察だけで特別な観察を必要としない	I 以外の特別な観察が不定期に必要	特別な観察が頻回に必要	特別な観察が絶えず必要
3 全面介助が必要	I-3 (3 点) 例) 高齢な患者・視力障害・社会的入院患者	II-3 (4 点) 例) 高齢な患者・視力障害・社会的入院患者・導入患者	III-3 (5 点) 例) 心不全などの合併症・全身麻下での術直後の患者	IV-3 (6 点) 例) 出張・病棟での透析
2 部分介助が必要	I-2 (2 点) 例) 主に外来患者・昼間透析患者	II-2 (3 点) 例) 高齢な患者・視力障害・昼間透析患者	III-2 (4 点) 例) 導入期の高齢患者・重篤な心疾患の合併症	IV-2 (5 点) 例) 心不全などの合併症・全麻下での術直後の患者
1 自立している	I-1 (1 点) 例) 主に外来透析患者・夜間外来透析患者	II-1 (2 点) 例) 主に外来患者・昼間外来透析患者	III-1 (3 点) 例) 高齢な透析患者・視力障害・導入期の患者	IV-1 (4 点) 例) 高齢な患者・術後の患者・重篤な心疾患の合併

<結果>

1. 対象属性：男性 45 名、女性 24 名、計 69 名
2. 年齢：平均年齢 67.4 歳（22 歳～87 歳）
3. 平均透析歴：2.5 年（内 1 年未満 34 名、1 カ月～31 年）
4. 観察、処置の程度について（図 1）

2007 年度では観察の程度が I 及び II のみであったのが、2010 年度では観察の程度が I～IV までとなっている。

5. 自立の程度について（図 2）

2007 年度は自立が 61%であったのが、2010 年度では 40%となっている。また、部分介助及び全面介助の割合がどちらも約 3 割となっている。

全面介助の割合が、2007 年度では 10%未満であったのが 2010 年度では 28%となっている。

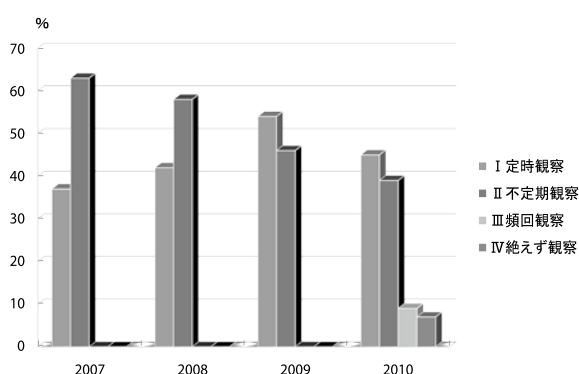


図 1. 観察・処置の程度

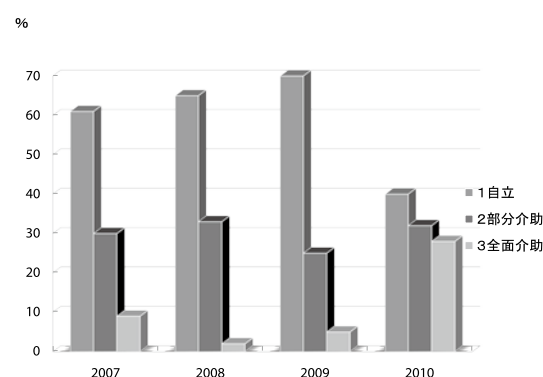


図 2. 自立の程度

6. 看護必要度の比較（図3）

1点（看護必要度が低い）の割合は変わらない。

2010年度は3点以上が約半数を占めている。

7. 患者数とスタッフ数の比較（表2）

2007年から2010年において、患者数は1.6倍、スタッフ数は1.2倍となっている。

8. 患者10人当たりのスタッフ数について（表3）

患者10人当たりのスタッフ数の割合を全国平均と比較すると、全スタッフ、看護師の割合では全国平均を下回る結果となった。臨床工学技士においては全国平均と同じであった。

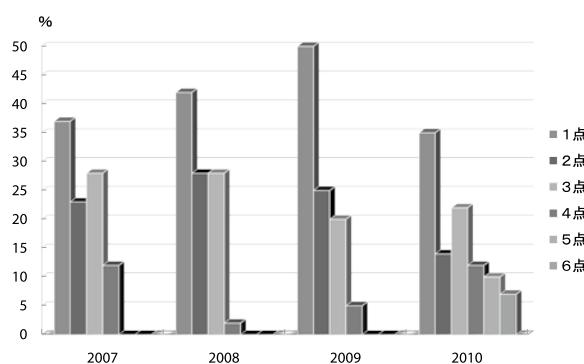


図3. 看護必要度

表2. 患者数とスタッフの人数（4月1日）

年度	2007年	2008年	2009年	2010年
患者数	43名	43名	56名	69名
スタッフ数	9名	10名	10名	11名

（2007年→2010患者数1.6倍、スタッフ数1.2倍）

表3. 患者10人に対するスタッフ数の割合

	全スタッフ	看護師	臨床工学技士
全国平均(2004年)	2.01人	1.58人	0.43人
当院人工透析室	1.59人	1.16人	0.43人

（2010年7月）

<考察>

看護必要度の調査を行ってみることにより、現在の当人工透析室は全国平均のスタッフ配置を下回るという結果となった。全国的な統計によると総合病院では全国平均より上回る傾向があるが、当院ではこのような結果となり、スタッフ数が不足していると言える。

また、4年間比較し、患者数が増加し、看護必要度が高くなっている現状が明確となった。

観察・処置の程度の比較では、観察の程度が頻回の患者数が多くなっており、2007年度と比較すると、認知症患者はほとんどいなく自立している患者が主であったのに対し、現在は入院中でモニターを装着中であつたり、酸素投与をしていたり、認知症があり体動が多く頻回に観察が必要の患者が多いことが要因であると考えられる。

自立度については、2007～2009年度では入院中の患者以外に外来通院の方では60～70%の方が自立状態であったのに対し、現在は入院中でストレッチャーでの来室の方も数名おり、外来通院でも車いす使用や、送迎ヘルパー利用の方が6名（約8.7%）となっていることが要因であると考えられる。

看護必要度の比較では、現在認知症症状を呈する方が12名（約17.4%）ほどおり、約半数を占めている3点以上に含まれるため、このような結果になったのではないかと考えられる。

これらの結果から、患者数の増加に伴い、安全に業務を遂行するということに第一に焦点が行き、透析中の患者とゆっくりコミュニケーションを取るという時間を十分に作れていなかった現状がある。

透析室看護師の役割として、三上は「自己管理ができるように患者とともに歩みながら、安全な透析が継続できるようにかかわっていくことが看護師の重要な役割です³⁾」と述べている。機械や装置に依存しながら健康回復や維持に対し主体性を持って永続的に取り組まなくてはならないという特性のある透析看護では、安全に透析を行いながら、個々の患者さんの段階に適した精神面や自己管理行動を高めてもらうための看護援助を行うことが透析室看護師に求められている事であり、今後の患者の自己管理行動に繋がってゆくものであると考える。また、患者とスタッフの関係が良好に保たれるためには信頼関係の構築が大切であり、そのためにもコミュニケーションが重要な役割を占めていると考える。

先行研究で杉田らが述べているように、「透析室看護必要度分類表」には患者のケアの度合いを観察・処置の程度と自立の程度で表したものであり、患者教育や支援などに使用される労力や時間、看護能力は組み込まれていない。患者に対しより質の高い看護を提供するためには、透析室における人員配置基準を設けていただき、十分なスタッフの配置が必要であると考えられる。

現在当院では8月よりCKD外来を立ち上げ、透析導入前の患者に対しての関わりに重点を置き、コミュニケーションを十分に取ることで信頼関係を深め、透析導入へのスムーズな受け入れ体制を作っていけるよう取り組んでいる。透析導入前からの関わりが、透析導入後の良好な関係へと継続していけるよう今後も取り組んでいきたい。

来年度には増員が予定されるという計画もあり、現在のスタッフで患者と関わりを深めながら

患者指導を行っていくことを今後の課題とし、安全に業務を行っていきたい。

＜結語＞

- ・看護必要度調査により、4年間比較し看護必要度が高くなった。
- ・当人工透析室のスタッフ配置は全国を下回る結果であった。

引 用 文 献

- 1) 政金生人：透析看護の知識と実際、P18、2010.
- 2) 杉田他：透析看護必要度と適正人員配置基準の検討、日本腎不全看護学会誌 vol.6 No.2 : 82-88、2004.
- 3) 三上裕子：透析ケア Vol.13 No.4、2007.

参 考 文 献

- 1) 日本腎不全看護学会誌 Vol. 6 No.2、2004
- 2) 宇田有希他：透析看護 第2版、医学書院、2005
- 3) 栗山哲：透析ナーシング、医学書院、1999
- 4) 吉田典：臨床透析クルズス 透析看護あれこれ、日本医学センター、1991